「古代語のしるべ」第六回

シリウタグ［踞］

蜂矢　真郷

シリウタグ［踞］について、『時代別国語大辞典上代編』（以下、『上代編』と示す）には、次のようにある。

しりうたく［踞坐］（動下二）腰をかける。踵（かかと）に尻をのせてすわる。「踞（しりうたけヲリ）坐　胡座」（敏達紀一四年）「於此処踞（しりうたけテ）坐胡座」（用明紀元年）「各各別踞（しりうたけキル）坐小牀」「安遠則虎（ノゴトクニ）踞（しりうたけキル）於江漢之海（ニ）」（天理本南海寄帰内法伝）「跂・蹲・踞シリウタク」（名義抄）→うずくまる

右の各例を、今少し詳細に挙げると、次のようである。

物部（の）弓削、守屋（の）大連、自（ラ）詣（イタリ）、於寺（に）踞（シリウタ（ケ）ヲリアクラに）坐胡座（に）。（「詣」の左に「マ（ウテ）」）

〔物部（ものべノゆげノもりやノおほむらじ）弓削守屋大連、自（みづか）ら、寺（てら）ニ詣（イた）り（詣（マう）で）テ胡座（アグラ）ニ踞（シリウタ）げ坐リ。〕

（『日本書紀』巻第二十・敏達天皇十四年三月・前田本院政期点）

仍（て）於（に）此處（ニて）踞（シリウタケアクラに）坐胡座（ニて）

〔仍（よ）りテ此（こ）の処（ところ）ニしテ胡座（アグラ）ニ踞（シリウタ）坐ゲテ〕

（『同』巻第二十一・用明天皇元年五月・図書寮本永治二［1142］年頃点）

各各別に小（さ）き牀に踞（シリウタケキ）坐ル。

（天理図書館蔵『南海寄帰内法伝』巻第一・平安後期点・大坪併治氏釈文）

安遠は則（ち）虎のことくニ江漢（の）〔之〕南に〔於〕踞（シリウタ）ケ、

（京都国立博物館蔵『同』巻第四・同・同）

跂シリウタク　（『類聚名義抄』観智院本法上七五［39オ］、声点（しょうてん）なし）

蹲シリウタク　（『同』同法上七六［39ウ］、同）

踞シリウタク（ケヲリ）（平平平平○○○）

（『同』同法上七六［39ウ］、「平」は平声（ひょうしょう）（低いアクセント）、「○」は声点なし）

他に、次のような例もある。

却（カへ）（り）て小（さ）き牀に踞（シリウタ）ケたり。

（天理図書館蔵『南海寄帰内法伝』巻第一・平安後期点・大坪併治氏釈文）

向（イデマシ）ニ於内裏佛殿之内南ニ踞（ニシリウタケアクラ（ニ））ー坐胡（アグラ）ニ座（シリウタ）ーテ

〔内裏の仏の殿の南ニ向（イデ）シて胡座（アグラ）に踞坐（シリウタ）ゲテ〕

（『日本書紀』巻第二十七・天智天皇十年十月・北野本鎌倉初期点）

まず、シリウタクかシリウタグか、つまりクの清濁がどうであるかが問題であるが、

蹲踞（略）上ウズクマル（平平上上平）下シリウタグ（記）（平平平上平）（略）

（『類聚名義抄』図書寮本一〇六、「上」は上声（じょうしょう）（高いアクセント）、

「平」の右傍線は声点が双点で濁音を表すことを示す）

のように、院政期に下るけれどもグと濁ることが明確な例があるので、とりあえずシリウタグとするのがよいと見られる。この訓の出典を示す「記」は、築島裕氏「国語史料としての図書寮本類聚名義抄」（『図書寮本類聚名義抄 解説索引編』[1976.11 勉誠社]）に「本書に「記」とあるのは未詳であるが日本書紀か史記ではないか。「古事記」ではないらしく、「古」又は「古語」とあるのは古語拾遺のやうである。」とされ、この訓の出典は『日本書紀』と見てよいであろうか。

先に挙げた『類聚名義抄』観智院本の三例目（「踞」字）は清音クかとも見られる（この例によって清音クと見るものもある）ので、『上代編』は、クとグとの清濁に揺れがあるか、ないし、クからグに濁音化したかと見て、見出しの「く」および各例の「け」「ク」に濁点を付さなかったかと推定される。しかし、清音クかとも見られる『類聚名義抄』観智院本の例の声点は、動詞のアクセントと見るのが些か難しいものであり、『同』図書寮本の例の声点を優先させてよいところと見られる。

次に、このシリウタグ［踞］のウタグは、「一本云 明王 乗踞胡座（一本に云（い）はく、明王、胡座（あぐら）に乗踞（しりうた）げて）」（『日本書紀』巻十九・欽明天皇十五年十二月）の例に対する日本古典文学大系68『日本書紀 下』［岩波書店］の頭注に「アは足。クラは桉。今いう床几。シリウタゲは、足を宙に浮かして腰かけていること。シリ（尻）ウチアゲ（打上）の約。utiage→utage.」とあるように、ウチアグ［打上］が約（つづ）まった（母音の連続を避けて先行母音が脱落した）ものと見られる。そうとらえれば、濁音グのシリウタグとすることになり、また、アグ［上］が下二段活用であるので、シリウタグ［踞］が下二段活用であることは当然と見られる。

そして、先に挙げた『類聚名義抄』図書寮本の例においてウタグの部分の声点が「平上平」であることからも、そのようにとらえてよいと考えられる。すなわち、動詞ウツ［打］およびアグ［上］の『類聚名義抄』の声点は、

斫ウツ（平上）　　（図書寮本一五六）

登アグ（上平）　　（同一二九）

のようであり、動詞の終止形のアクセントと連用形のそれとは同じであるので、ウチ（平上）＋アグ（上平）が約まってウタグ（平上平）になるのは自然である。なお、シリ［尻］の声点は、「尻シリ（平平）」（『類聚名義抄』観智院本法下八九［46オ］）である。

三音節の動詞のアクセントは、金田一春彦氏『国語アクセントの史的研究 原理と方法』［1974.3 塙書房］［本論第一章第二節、［付表8］［付表9］など］を参照しつつ見ると、高起式「上上平」の語（金田一氏の、「三拍動詞」「三・四拍動詞」の「第1類」）と、低起式「平平上」ないし「平平東」（「東」は平声軽［下がるアクセント］）の語（同じく「第2類」）とが主であるが、「平上平」の語（「三拍動詞」の「歩く」類、「三・四拍動詞」の「抱える」類）もある程度ある。その「平上平」の語のうち～グのものに、カカグ［掲］［下二段］・ササグ［捧］［下二段］があり、「巻きあげる。かき上げる。カキ=アグの約。」（『上代編』、カカグ［掻上］の項）、「サシ=アグの約。」（『同』、ササグ［指挙・擎］の項）のように、カキ［掻］＋アグ［上］、サシ［指］＋アグ［上］が約まったものと見られる。モタグ［擡］［下二段］も、『上代編』に項はないが、「「も（持）ちあ（上）ぐ」の約」（『古語大辞典』［小学館］）とされ、モチ［持］＋アグ［上］が約まったものと見られる。『類聚名義抄』では、

掻カク（平上）　（観智院本仏下本八一［42オ］）
袪カヽグ（巽）（平上平）（図書寮本三三二、「巽」は出典が『文選』であることを示す）
指サス（平上）　（観智院本仏下本三九［21オ］）
奉サヽグ（平上平）　（同仏下末二四［13ウ］）
持モツ（平上）　（同仏下本七一［37オ］）
擡モタグ（平上平）　（同仏下本七三［38オ］）

のようであるので、アクセントから見ても、カキ（平上）＋アグ（上平）、サシ（平上）＋アグ（上平）、モチ（平上）＋アグ（上平）が約まって、カカグ（平上平）・ササグ（平上平）・モタグ（平上平）になったと見られる。さらに、メサグ［召上］［下二段］のアクセントは確認できないが、「召シ=上アグの約。」（『上代編』）とされ、メス［召］「召メス（平上）」（『類聚名義抄』高山寺本74オ）であるので、同様に「平上平」であろうと見られる。

さて、右の他に、ウタゲ［宴］がある。『上代編』には、次のようにある。

うたげ［宴］（名）酒宴。宴会。「命舎人等為宴於所々」（天智紀七年）「大目秦忌寸八千島之館宴歌一首」（万三九五六題詞）「讌ウタケウツ」（名義抄）【考】「旨酒餌香市不以直買、手掌掬亮拍上賜」（顕宗前紀）「讌エン、ウチアケアソフ」（色葉黒川本）や、竹取物語の「このほど三日うちあげ遊ぶ」、宇津保物語の「七日七夜とよの

あかりしてうちあげ遊ぶ」などのウチアゲがウタゲと約されたものという。ウチアゲは酒宴の際に手をたたくこととといわれているが、右の顕宗前紀の例は確かにそうであろう。

現代でも、何かを終えた後にそれに関わった人達が集まってウチアゲと呼ばれる宴会が開かれることがある。上代・中古においても同様のことがあったかと推定される。ウタゲ［宴］は、(1)ウチアグの連用形が名詞化したウチアゲが約まったものか、(2)ウチアグの約まったウタグの連用形が名詞化したものかであると考えられる。シリウタグの形ではあるが、動詞ウタグの例が確認できるので、どちらかと言えば(2)と見る方がよいか。

そして、『上代編』の【考】欄が挙げる『日本書紀』巻十五・顕宗天皇即位前の例について、図書寮本永治二［1142］年頃点の「拍上」の右訓に「ウチアケ」と、左訓に「テウチ」とあるところから見て、ウチアゲ［打上］とテウチ［手打］とはほぼ同意と見られるので、ウチアグ［打上］は、ウツ［打］の意を持つのが本来であると考えられるが、徐々にウツ［打］の意を失って接頭語化して行き、シリウタグ［踞］の例ではウツ［打］の意をほとんど失ったものと見ることができる。ウチの接頭語化については、阪倉篤義氏「接頭語「うち」の消長」（『国語語彙史の研究』4［1983.5 和泉書院］）が参照される。

なお、ウタゲ［宴］をウチアゲ［打上］の約とする説は、本居宣長『古事記伝』他にある。『古事記伝』二十七は、「宇多宜（ウタゲ）は、拍上（ウチアゲ）の切（ツヅ）まりたる名なり、」として、『日本書紀』顕宗天皇即位前の例を挙げ、「酒を飲樂（ノミタノシ）みて、手を拍上（ウチアグ）るより云る名なり、【今（ノ）世にも、酒宴（サケノミ）して、手を拍（ウツ）ことあり、】」とされ、『竹取物語』『宇津保物語』などのウチアグの例も挙げられる（『本居宣長全集』11［筑摩書房］による）。

また、築島氏『平安時代の漢文訓読語につきての研究』［1963.3 東京大学出版会］によると、シリウタグ［踞］は漢文訓読特有語と見られる。ウチアグ［打上］は、平安時代の和文の例があるので、漢文訓読特有語ではない。

以上に見てきたように、シリウタグ［踞］はシリ［尻］＋〔ウチ［打］＋アグ［上］〕の構成であると考えられる。また、『日本書紀』古訓のシリウタグの例は「踞坐」とあるものが複数あるが「踞坐」をシリウタゲヲリと訓（よ）む例もあり、『南海寄帰内法伝』に「踞坐」をシリウタゲキルと訓む例も「踞」字をシリウタゲと訓む例もあって、『類聚名義抄』図書寮本の例をも参照して、シリウタグは「踞坐」字の訓とするより「踞」字の訓とする方がよいと見られる。